

本論文は、『源氏物語』の倫理思想を、「光源氏とはいかなる存在であるのか」という問いを通して読み解く試みである。

光源氏の物語は、親密な他者（桐壺更衣）の死に始まり、親密な他者（紫の上）の死に終わる。他者に先立たれることによって枠取られた光源氏の生は、その内部においても、さまざまな他者に先立たれる経験を反復する。論者は、光源氏と女君達の関係の分析を通じて、光源氏という「存在の根幹」を、先立たれてあること、すなわち、死の予感を潜在させた「間柄的な不安」として捉える。

光源氏にとっては、あるべき間柄の理想の成就態は、すでに、常に、死による断絶が分かちがたく食い込んだものとして直観されている。このいわば存在論的な不安は、「心細さ」という基調的な感情となって、物語の随所に発現している。光源氏の「心細さ」は、「人間世界の本来的な綻びの主体的な捉え方」とであると、論者は指摘する。

さらに論者は、テキストの細部に丹念に分け入りながら、この「心細さ」が、「見られる」ことを求めつつ「見る」という、光源氏の特徴的な営みを導き出していることを示し、それが「光る」という象徴とも結びついていることを論証する。「心細さ」ゆえに「見る」、「心細さ」ゆえに「光る」ことを、物語の具体的場面に即しつつ明らかにした第二章は、本論文の核であり、その説得力ある論述は高い評価に値する。

テキストに内在して得られたこれら諸概念をもとに、死や超越をめぐる日本思想史の問題系をも参照しつつ、論者は、次のように結論づけている。光源氏の生は、「心細さ」を「見る・見られる」ことにおいて、存在の根幹における他者との共同性を求める営みである。光源氏の物語は、その営みの極限が、どのような形で絶対的なものの入り口に到達するかを描いた物語であった。

以上、本論文は、「光源氏という存在の性格」に着目しつつ、『源氏物語』がいかなる意味で人間存在の根底に触れる作品であるかを明らかにしたものである。普遍的な倫理への問いを、物語の内部から提示しえている点は、本論文の大きな特色であり、『源氏物語』を倫理思想史的に捉える一つの基本的枠組みを提示したことの意義は大きい。テキストの分析は精密であり、方法的立場の反省、先行研究への目配りもよく行き届いている。一方で、テキスト概念抽出に際しての用例挙証にやや荒さも見受けられるが、これは本論文全体の価値を損ねるほどのものではない。

よって、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。